



冬空晴れて競う学生たち

(第50回学長杯争奪駅伝大会。総勢51チームが出場。午前11時、女子の部「花の第一走者」13人が、号砲ならぬ号令スタート…。03年12月14日開催)



第 23 号  
発行・鴻文会

山口大学 文理学部 文学科  
人文学部 同窓会  
山口大学人文学部内  
電話 (083) 933-5200

(連絡事務所)  
山口市平井773-2  
沖田ビル202

電話・FAX (083) 928-4527  
郵便振替口座 01500-4-15902  
http://  
homepage3.nifty.com/koubun/  
メール:koubunkai@nifty.com

# 世代の覇者と世紀の空

—— 大学法人化とわが博物館経営論 ——

鴻文会監事 北川 健

一 一〇〇年！歴史の針が逆戻り  
大学の独立行政法人化に向けて、仮称「支援財団」が発足することとなり、その基金募集があった。

不肖私は、その「支援！」という名にいたく感激。「これで歴史の針が一〇〇年進む！」として、憎越にも応分半分不相応(?)の拠出をした。

ところが、いざ設立の蓋をあける段階になってみると、仮称「支援」の名は、なんと正式名「後援」にすり替わっていた。

冠称「支援」の事例は、全国見渡しても「他に二校しかない」からだという。ここでも、断然「横並び」方式——。「独立」「自主」を標榜してのスタートからして、このていである。私は「ペテンにかかった」思いであった。

「これで一〇〇年！歴史の針が逆戻りしてしまった」、心中、私はそう叫んだ。二 官は「支援」を受けるにあらず

すでに独立法人化した国立科学博物館を、東京上野に訪ねてみた。入口の看板に法人化に伴う館長の「あいさつ」文が掲げてあった。

私は、てっきり「国民の皆様のご理解とご支援を……」とでも書いてあるもの

とばかり予期して一読した。しかし、末尾結句は「ご理解とご協力を……」であった。「支援」という言葉は、そこでも無かった。

なるほど、国はもとより独立法人もまた、国民には「協力」は要請しても、国民からの「支援」なんぞは、決して受付けるものではないのである。政府みずからは「国際貢献」「後方支援」「復興支援」「人道支援」を呼号しようともである。

国および独立法人にあっては、国民は対等者⇨パートナーたる「支援」者ではなく、あくまでも「協力」者、「後援」者、客体的な位置づけにすぎないのである。

三 「支援」無用で進むか自主事業  
とすれば、独立法人は何をもってみずからの「支援」基盤とするのか。あくまで政府「交付金」の範囲にだけとどまって鎮座しておられるものか——。

「独立」「自主事業」とは、従来とは異なる部外、分野に、新たな「支援」と「公益」の輪を求め、そこに活路を見出ししていくことであるはず。相手に対するパートナー扱いせずして、どうしてそれが可能だろうか。

「支援」を「後援」とすり替えては、

みずからの前途をみずから閉ざす、後ろ向きの所為である。

#### 四 「一ドル入館者でも」支援者

アメリカの博物館で入館料(一ドル程度)を払うと、胸元に付けるバッジをくれるところがある。聞けば「コントリビューター(貢献者・支援者)」の意味だという。

そこでは一介の入館者でも、れつきとした「支援者」扱いなのである。

博物館を舞台にしたアメリカ映画のシーンでも、受付カウンターの男性館員が騒々しい子供達を強く注意すると、居合わせた女性学芸員が「そんなに叱らないで。あの子達だつて、将来は支援者になつてくれるかも知れないのだから」と、諭す一幕がある。

アメリカの博物館界には、「支援者によって支えられる」という姿勢と思想が根幹にある。

これが日本だと、「入館者心得」「順路」「無断撮影禁止」「受益者負担」「寄付採納願」などなど、実に「お上」の論理と姿勢を体現している平気である。

#### 五 「第三セクター」は日本的詐称

明治以来、「国益」「公益」をみずから代表するとしてきたものは、政府であり「官」であった。そして「民間」を代表し、筆頭「貢献」者を自認してきたのは、企業であった。

ようやく、「官から民へ」が告げられる昨今。しかし、その「民」とは何か。もはや、かつての企業オンリーでも、あの「半官半民」、官庁と企業による「第三セクター」もどきのスリ替えであつて

はたまるまい。

そもそも第一セクターが官庁であり、第二セクターが企業である。その一二を足して二で割るような企業体をして、それがこどもあろうに「第三セクター」であるなどと詐称するのは、まさに特殊日本的にして体制的な、謀略と専横のまやかしにほかならない。

#### 六 本来の「ザ・サード・セクター」とは

本来の「サード・セクター」とは、官庁・企業以外のものを指す。なればこそ「第三！」なのだ。すなわち公益法人、財団や社団法人、学校法人や宗教法人、それに非営利団体であるNPOやNGO、それらが真の「第三セクター」||ザ・サード・セクターであることを、いまこそ私達は知つてよい時である。

この一大「第三勢力」が日本では、いまだ結果も浮上もしていないのである。実に官庁・企業の「第一・第二セクター」、加えて行政補完型法人などでもつて、封印、隠蔽され、みずからの市民権称号であるはずの「第三セクター」の名すら奪い去られてきているのである。

#### 七 次世代「第三次」社会のビジョンを

もしも「官から民へ」を云うなら、この本来の意味での「第三セクター」||ザ・サード・セクターこそが、「民」と「公益」の旗手として登場してくることではなくてはなるまい。

それが「第三次社会」||次世代社会だと、私は見ている。

そうした「次世代||第三次社会」「公益・支援・参加」の体制が二一世紀社会のビジョンとして、国民的規模での合唱

として語り上げられることがなければ、世はコトも無く、小泉式「オレオレ」小劇場の「改革」空白劇に終始する。

この次世代「第三次」社会、「公益・支援・参加」社会の編成の原理とコンテを提示、体現していく作業と連動してこそ、独立法人化の前途も、また不肖わが講義「博物館経営論」のもつ戦略的意義も、はじめて歴史的、世代的に認証されるものだ、と私は考えている。

#### 八 戦争「事象」の行為主体は云えない

先日、広島での日本平和博物館会議のシンポジウムに足を運んで驚いた。パネラーの一人P館(行政補完型法人)の館長は「日本は近隣諸国に迷惑をかけた」と告げつつも、なんと

「しかし、彼国での戦争を日本がやった、とは云えない。もちろん戦争の事象はありましたがネ……」

と述べるのである。

戦争行為の主体も、「侵略戦争」だとも、決して云おうとはしないのである。それも、「館としての、判断基準、価値基準が大事だ」とするシンポ全体の論脈のなかでの、この公言なのである。

「自虐だ」とする前に「他虐を知れ!」と云い張る論理と立場を、持ち合わせていないのである。

いったい平和博物館としての原点と基盤、姿勢と論理を、いまやだれが確保、保障するのか。もはや一部の行政委託型法人や行政吏員OB館長には、その見識も力量も逸失した情勢となつているのである。

このような事態への市民的立場からの

「支援・参加・貢献」||アンガージュマン(?)こそ、「公益!」として歴史的、社会的に要請されているはず。――。

#### 九 どう「世代の覇者」たりうるのか

「世代の覇者の歌声は、

世紀の空に高らかに……」  
かつて不肖私達は、そう「学生歌」を歌い、みずからを事大主義的、自己肥大的にも「世代の覇者」たるべく鼓舞、自奮してきました。

その「世代の覇者」「世紀の空」とは何か。何をもって「世代の覇者」「世紀の空」とするのか。――。

みずからの「世代」に埋没することなく、みずからの「世代」を超えて、これに替わる、次なる「次世代社会」を想起、展望してこそ、それが「世紀の空」であり、その構想と創出に手を貸しうる者こそ「世代の覇者!」だ、と私は自己規定している。

少なくとも、その姿勢、その意気なくして、私達は「次なる世代」と向き合うことはできない。

#### 一〇 「青春回帰」からのブリッジ論

前回総会の監査報告に際して、「同窓会もまた、よきコントリビューター(貢献者・支援者)たるべし」と、私は改めて申し添えた。その本意のほどと、いささかの余日譚を、ここに告げてみた。

ささやかながら同窓と学窓の接点に身を置いての、「青春回帰」を介しての一つの「ブリッジ」論(前号・立川副会長巻頭稿参照)||連帯論のつもりではある。(文理第八回卒・国史学/人文学部非常勤講師「博物館経営論」など担当)

# 国立大学の法人化について

山口大学人文学部長 田中 晋

鴻文会同窓生の諸兄弟にはご清祥のごとお慶び申し上げます。

さて国立大学もいよいよ法人化の年を迎えて戦後最大といわれる変革の時期に直面しております。紙面をお借りして、法人化の概略につきご報告傍々所感の一端を述べさせて頂くことに致します。

平成十五年七月九日、国立大学を文部科学省の行政組織から独立した法人に移行させる「国立大学法人法」が成立し、現行の国立九十九大学は平成十六年四月より八十九の国立大学法人に再編されることとなります。これにより、山口大学も「国立大学法人山口大学」と名乗ることとなります。国立大学法人制度の主眼点はおよそ次のようにまとめられます。

- ・「大学ごと」に法人化し、自律的な運営を確保する。
- ・「民間的発想」のマネジメント手法を導入する。
- ・「学外者の参画」による運営システムを制度化する。
- ・「非公務員型」による弾力的な人事システムへ移行する。
- ・「第三者評価」の導入による事後チェック方式に移行する。

組織については、国立大学法人に役員として学長、理事及び監事を置き、中期計画や予算の作成など重要事項について

は学長及び理事で構成される役員会の議を経て学長が決定するとしています。この役員会の新設によりトップマネジメントの体制を整えることとなります。審議機関としては、経営に関する重要事項を審議する経営協議会と教育研究に関する重要事項を審議する教育研究協議会が設置されます。また大学運営に民間的発想を取り入れるため、学外有識者の参画を義務づけ、役員会の理事、または監査を担う監事に学外者を含めること、経営協議会も半数以上を学外者とする事が定められております。

人事については、非公務員型となるため国家公務員制度下の各種規制が撤廃され、各法人が学長の任命権の下で独自に柔軟な人事システムを構築し、能力・業績に応じた給与システムの導入も可能となります。また兼職等の規制も撤廃されるため、産学官の連携は一層密接となり、研究成果を社会に還元しての社会貢献も促進されることとなります。一方、労働基準法を適用した就業規則を定めねばなりません。

法人化後の大学は教育・研究等につき六年間の中期目標・中期計画を策定し文部科学省に提出して文部科学大臣の認可を受けなければなりません。計画の達成度状況については、第三者機関である国

立大学法人評価委員会や大学評価・学位授与機構による評価を受けることとなりますが、その評価に基いて文部科学省が各大学の主要な財源となる運営費交付金を傾斜配分するという仕組みとなっております。

ところで、国立大学の法人化は、従来の大学運営のあり方を抜本的に見直すことにより、大学の自主性・自律性をこれまで以上に高め、以て特色ある教育・研究活動を活性化することがその眼目とされており、同時にいろんな問題も抱えております。この度の法人化はそもそも行財政改革の一環として出てきた経緯が示すとおり、そこにおいては競争原理を大幅に取り入れて、経営の視点を重視した新しい組織運営体制が導入されることとなります。法人化後も引き続き国費が投入されるわけですから、皆様のご理解を得るには経営面での努力が必要であることは言うまでもありません。しかし大学のあり方を論ずるに当たって競争原理を押し進めれば、財政的基盤の弱い地方国立大学の、とりわけ文系の基礎的学問分野の衰退につながる事が危惧されます。地方国立大学には地域の学術文化を担ってきた歴史がありますが、基礎的学問分野の領域は、いわゆる実利要素は少なく短期間のうちに目に見える効果を期待できるものではありません。六年間の中期目標の達成度が予算配分に反映されるため、目先の成果のみを優先し、徒に効率主義に走ることになれば、落ち着いた環境においてなされるべき真の意味での教育研究は育ち得ないでありまし

よう。法人法の目的とする、教育研究に自主的・自律的に取り組む個性豊かな大学の創出は、競争原理に立脚した実用性・効率性の視点において論じられるのではなく、自由なる学問研究を保証し得てこそ実現可能になるものと思っております。私たちは、法人化された大学にあっても、人文社会系学問分野の果たしてきた役割を継承し、諸学の基盤である人文科学に裏打ちされた有為の人材を養成することに社会的使命があると認識しております。

二十世紀、自然科学は驚異的な発展をなしましたが、一方において人間に関する学問がなくてはなりません。「知の時代」と位置づけられる二十一世紀にあつて、「人間とは何か」を問う人文学部の担う役割には極めて大きなものがあると思えます。今後ともご理解、ご支援賜れば幸甚と存じます。

## 鴻文会の「賛助会員」の制度に各位のご協力を

鴻文会活動の資金は、ご存じのように、毎年度入学される新入生会員の「終身会費」(1万円)によってまかなわれ、それ以外の収入はほとんどございません。

鴻文会は、この22年の間、同窓会総会の開催、人文学部や日中学术交流奨励会への種々の支援、名簿管理(名簿発行)、会報発行などの活動を行ってま

いりました。近年はこれに、山口大学後援財団等への支援、ホームページの管理などが加わって、活動が多様化し、活発化しております。しかし、それらの活動を支えるべき資金は、昨今の厳しい経済事情もあって、決して安心できる状態ではありませんでした。そのような中において、お陰を持ちまして、昨年度、卒業生会員多数の方々から「賛助会員」として多くのご厚志を頂戴し、活動を支えていただきました。各位のお名前を左に記して、御礼に代えさせていただきます。

なお、本年度も引き続きお力添えをたまわればと思います、お願い申し上げます。つきましては、加入者名「鴻文会」(郵便振替口座0150004115902)と記した振替用紙を同封いたしております。それをお使いいただいて、昨年度同様に、何卒一口千円(なるべく二口以上)のご寄付をよろしく願います。

**賛助会員一覧(五十音順、敬称略)**

相川忠久、青木亜希子、青木寛、東玉恵、生野龍二、池田厚子、池本博泰、石原誠、石丸一政、井上真理子、井上基子、伊豫英城、岩尾功一、岩熊寛、岩崎浩子、岩政和子、岩本春男、榎本美由紀、太田紘子、大下一彦、緒方正親、小川朝子、沖田光春、小野徹、表川明美、加来孝代、榎原葉子、勝本由紀、門井好恵、加藤寛子、金山嘉代子、金子建二、河野庸二、川邊貴弘、菊谷進、桐原恵子、桑原清繁、小池美佐子、肥塚美也子、児玉智子、小

西啓子、小山良昌、権代鉄也、権代良子、近藤千鶴子、坂正興、佐々木雅子、佐藤智子、澤田サツエ、椎野由紀子、重田昌宏、重村和子、島田麻希子、清水哲史郎、梶村清安子、住吉隆義、添田建治郎、高橋幸輔、武居スミヨ、武谷実、辰巳郁子、田中敦子、田中伸、田中力人、田辺智子、田村浩三、田村美佳子、利重迪子、戸谷美代子、富永寛子、永井温樹、長井知子、中垣八郎、中島透、中野隆司、長廣不二子、中村あけみ、成末和正、新見裕、野村悦子、芳賀まり子、秦紀代子、八田彰、羽仁和子、羽仁裕、瀧野晃二、瀧野勢津子、林協三、林千鶴、原田明、菱井理加、日野綾彦、平田昌司、広田恵、廣本理奈子、福田あゆみ、福原綾子、藤井日正、藤井舒夫、藤井英樹、藤澤敏行、藤田和彦、藤田美穂、藤永公然、藤原秀晴、堀川智史、本田隆三、前原礼子、松浦学、松崎公彦、松下富子、松本馨、松元真佐子、溝部忠増、光永昇、宮内美貴子、宮崎智子、宮原省吾、宮藤隆夫、村上秀夫、村上正和、村田和夫、村田祥子、本井範子、森重祐二、柳浦俊静、山縣乙水、山本力、横内淳、脇正典、渡邊美和

**鴻文会のホームページについて**

鴻文会は昨年度ホームページを一新し、鴻文会の紹介と活動内容、新着情報などを記載しております。一年間で二回ほど更新いたしました。いろいろなアイデアをお寄せください。また、掲示板も併設しております。鴻文会と、また卒業生の皆さん相互の交流に少しでもご利用ください。

● ホームページのアドレス

<http://homepage3.nifty.com/koubun/>

**【お知らせ】**

山口大学教育研究後援財団より、財団の賛助会員になつていただきたい旨の、同封のような依頼がありました。

**平成 14 年度 事業 報告**

1. 第29回役員会 (6月8日)
2. 山口大学日中学術交流奨励会理事会及び総会 (7月4日)
3. 第8回山口大学同窓会連合会理事会 (8月1日)
4. 会報「鴻文」第22号発行 (2月1日)
5. その他

**平成 14 年度 決算**

収入総額 2,762,007円 支出総額 2,391,245円 残高(次年度繰越金) 370,762円

＜収入の部＞

科 目	当初予算額	決算額	比較増減	摘 要
繰越金	375,956	375,956	0	
会費収入	2,000,000	1,870,000	△130,000	10,000×187人
名簿収入	0	2,000	2,000	
繰越助金	0	0	0	
雑収入	0	383,710	383,710	H.14年4月1日～H.15年3月31日
雑収入	130,000	130,341	341	連合同窓会家賃130,000円、預金利子、その他
合計	2,505,956	2,762,007	256,051	

## 〈支出の部〉

科 目	当初予算額	決算額	比較増減	摘 要
会 議 費	100,000	29,829	△70,171	役員会、交通費、その他
印 刷 費	250,000	178,500	△71,500	会報印刷5,000部、封筒印刷3,000枚
郵 送 費	400,000	427,780	27,780	会報郵送料、葉書購入、通信連絡費
事務所運営費	900,000	776,700	△123,300	家賃390,000円(32,500円×12)、人件費336,700円、事務所経費50,000円(電話、町内会費)
事 務 費	100,000	12,411	△87,589	消耗品、その他
寄 付 金 費	250,000	240,000	△10,000	日中学術交流奨励会・財団運用資金への寄付
慶 弔 費	40,000	10,000	△30,000	
積 立 金	300,000	683,000	383,000	特別会計へ(賛助金383,000円)
総 会 費	0	0	0	
予 備 費	165,956	33,025	△132,931	懇親会補助、その他
合 計	2,505,956	2,391,245	△114,711	

## 〈特別会計〉

科 目	13年度財産	14年度財産	比較増減	摘 要
中期国債ファンド(H.10年・H.11年)	1,411,540	1,411,675	135	H.15年3月31日現在
定額預金(H.12年)	1,409,000	1,409,000	0	
定額預金(H.13年)	1,000,000	1,000,000	0	
定額預金(H.13年賛助金)	288,000	288,000	0	賛助金(H.13年4月1日～H.14年3月31日)
定額預金(H.14年)	0	300,000	300,000	一般会計から繰入
定額預金(H.14年賛助金)	0	383,000	383,000	賛助金(H.14年4月1日～H.15年3月31日)
合 計	4,108,540	4,791,675	683,135	

平成15年7月23日、監査の結果過誤なく的確に経理されていることを確認します。

監事 藤 井 英 樹  
北 川 健

## 平成 15 年 度 事 業 計 画 (案)

1. 山口大学同窓会連合会(5月15日)
2. 山口大学日中学術交流奨励会理事会及び総会(7月2日)
3. 第30回役員会(7月26日)
4. 会報「鴻文」第23号発行(2月の予定)
5. その他

## 平成 15 年 度 予 算 (案)

## 〈収入の部〉

科 目	15年度予算額	14年度予算額	比較増減	摘 要
繰 越 金	370,762	375,956	△5,194	
会 費 収 入	2,000,000	2,000,000	0	10,000×200人(15年度入学者数)
名 簿 収 入	0	0	0	
繰 入 金	0	0	0	
雑 収 入	130,000	130,000	0	教育研究後援財団家賃130,000円
合 計	2,500,762	2,505,956	△5,194	

## 〈支出の部〉

科 目	15年度予算額	14年度予算額	比較増減	摘 要
会 議 費	100,000	100,000	0	役員会、交通費、その他
印 刷 費	200,000	250,000	△50,000	会報印刷(5,000部)
郵 送 費	430,000	400,000	30,000	葉書購入、会報郵送料、通信連絡費
事務所運営費	800,000	900,000	△100,000	家賃、人件費、事務所経費(電話、水道、町内会費)
ホームページ維持費	70,000	0	70,000	プロバイダー契約料、メールウィルスチェック料、謝礼ほか
事 務 費	20,000	100,000	△80,000	消耗品、その他
寄 付 金 費	250,000	250,000	0	日中学術交流奨励金・教育研究後援財団
慶 弔 費	40,000	40,000	0	
積 立 金	300,000	300,000	0	
総 会 費	0	0	0	
予 備 費	290,762	165,956	124,806	
合 計	2,500,762	2,505,956	△5,194	

## 〈特別会計〉

科目	15年度財産	14年度財産	比較増減	摘要
中期国債ファンド (H.10年・H11年)	1,411,675	1,411,675	0	
定額預金 (H.12年)	1,409,000	1,409,000	0	
定額預金 (H.13年)	1,000,000	1,000,000	0	
定額預金 (H.13年)	288,000	288,000	0	賛助金 (H.13年4月1日～H.14年3月31日)
定額預金 (H.14年)	300,000	300,000	0	
定額預金 (H.14年)	383,000	383,000	0	賛助金 (H.14年4月1日～H.15年3月31日)
定額預金 (H.15年)	300,000	0	300,000	一般会計から繰入
合計	5,091,675	4,791,675	300,000	

## 寄稿

## 中世山口の文芸の跡

「周防国仁平寺の「延年」」

小野美典



現在の仁平寺本堂

『徒然草』五十二段以下の三段は、仁和寺の法師の失敗談とも呼びうる章段で、素材その物の面白さもさることながら、作者兼好の巧みな筆致が我々読者を説話の内部にぐいぐいと引き込み、不思議な魅力をもった章段群となっている。

五十二段は、男山山頂にある石清水八幡宮を、山麓の撰社のことと勘違いして、山頂の本社に参詣しないまま帰った法師の話。五十三段は、座興に足鼎を被って踊ったところが、足鼎が抜けなくなると、喜劇転じて悲劇（当

人には悪いが、読者としてはやはり喜劇?)となつた法師の話。五十四段は、稚児を誘い出して遊山に出掛けたものの、事前に埋めておいた食べ物を盗まれてしまい、趣向倒れに終わった法師の話である。

ところで、これら一連の説話の中には、門跡寺院として高い格式を誇つてきた「御室御所仁和寺」には、およそ似つかわしからぬ法師達が登場する。酔っ払って足鼎(三本足の付いた鉄製のかま)を被って舞い出す法師。それを見て「満座、興に入る」法師。一昔前の、会社の忘年会の隠し芸を髣髴とさせる兼好の筆遣いは的確である。いつの時代とこの世界にも、芸達者はいらぬもので、『徒然草』をひもとく現代の我々は、ほほえましくさえなってくる。

この芸達者な僧侶は、「能ある遊び法師」(五十四段)という呼称で登場する。『徒然草』が成立したと言われる一三〇〇年代初頭には、既に「遊び法師(遊僧)」なる言葉が定着し、芸能を専らにしていた僧侶達がいたのである。彼らは、寺院の法会の後や参詣した貴人の接待の場において、当時流行していた芸能の中から寺院にふさわしい芸能を演じていた。

これらの芸能を総称して「延年」と呼んでいる。中世から近世にかけては、東大寺や興福寺・園城寺などの大寺院をはじめとして諸寺で行われていたが、現在は岩手県平泉の毛越寺や中尊寺などに一部残っているのみである。この延年は、中世から近世にかけての芸能

の実態を知る貴重な手掛かりであるが、その記録が詳細に残っていることは少なく、台本などで現存するものは、古くて一五〇〇年代のものである。

そうした中で、あの『徒然草』の書かれた時代から数十年後の観応三年(一二三二)に、山口の地で「延年」が盛大に行われたことを示す資料がある。山口県文書館に所蔵されている「氷上山興隆寺文書」の中の『周防国仁平寺本堂供養日記』である。山口県に住んでいる人で、「興隆寺」と聞いてピンとくる人は、相当な歴史通であろう。しかし、「仁平寺」と聞いて、その場所がわかる人はごく少数ではなからうか。そして、その仁平寺で、文学史上非常に貴重な延年が行われていたことを知る人は、もっと少ないのではなからうか。『周防国仁平寺本堂供養日記』に関しては、翻刻・解説などもされているので、今回は、仁平寺に関して少し紹介してみたい。

そもそも、この資料(『供養日記』)を最初に発見したのは高野辰之博士で、その発見のいきさつも交え、本文に注釈を加えて発表されたのが、昭和八年(『岩波書店「文学」第一巻一号)であった。ただ、その中で、「仁平寺は今無いといふ」と書かれ、これ以降の延年研究では、仁平寺が廃寺となったことを前提に論じられていくようである。しかし、仁平寺は地元の人々に守られて細々とではあるが存在し続け、今現在、初代地からやや離れた所に、「曹洞宗日吉山仁平寺」として存在している。

仁平寺のことを窺い知ることの出来る最も古い資料は、前述の『供養日記』である。これによると、当時の仁平寺は大円坊・東蔵坊・竹林坊など十以上の塔頭をもつ大寺院で、大内氏の重臣から馬の寄進なども受けている。恐らくは、大内氏が代々氏寺として崇敬していた興隆寺に次ぐ寺院として、重要視されていたのであろう。この仁平寺の本堂を、大内弘幸が修築し、その供養会が一三三二年の三月十四日から三日間、盛大に行われたのである(ただし、弘幸は供養会より前に逝去している)。供養会に先立って、三月三日には山王社で終日舞楽が奉納されている。

本堂供養会の延年では、まず「蘇合香」の舞いが会場の邪気を静める目的で奏舞され、「(一番) 俱舎」から「(十四番) 風流」まで、様々な芸能が上演されている。開口・答返・連事など、延年としては定番のものが見られるが、ここでは詳細を省く。注目すべきは、「(十一番) 狂言」と「(十二番) 心曲」である。前者は、「狂言」という名称が使用されたかなり古い例。もちろん、現在の「狂言」と同一とは即断できないが、「山臥説法」と記された曲目からして、現行の何らかの山伏狂言に属している可能性は低くない。後者の「心曲」は、高野博士によると「冥曲」のことという。鎌倉から室町にかけて、武家や僧侶などの間に流行した謡い物で、天台声明の節回しの影響を受けつつ、扇拍子などで謡い囃されたもの。いずれにせよ、このような鎌倉時代の芸能の詳細が山口の地に残っている

ことは、誇るべきことと言える。

その後の歴史には、仁平寺はほとんど登場しない。江戸時代後期に成立した『防長寺社由来』や『防長風土注進案』などに、ようやく記述が見られる程度である。

『防長寺社由来』は、諸村の各寺社からの上申書を集めたもので、享保十一年(一七二六)の山王社宮司の上申書には「仁平寺は大破に及び候へども、山王並びに弁財天・八王子森・水海・丈六の地藏等は今に至るまで存置仕り候ふ」とあり、文化三年(一八〇六)の問田村庄屋の上申書には、大内氏没落以後、仁平寺の脇坊諸堂は断絶して、五重塔の礎石だけが残り、本堂脇の小庵に禅昌寺から番僧が置かれていた旨が記されている。

この庄屋の上申書には、仁平寺の隆盛期には月次の連歌会が盛んに行われ、連歌師宗祇も寺を訪れて「声若しまだすが内の郭公」なる発句を残したとの言い伝えが記されている。この句は、「菓が内」と「菅内(仁平寺一帯の地名)」を掛詞とし、山口の名鳥郭公を詠み込んである。もし、この伝承が正しいとすれば、宗祇二度の山口来訪のうち、以後の宗祇の文学に大きな影響を与えた最初の来山(一四八〇年六月下旬〜翌年四月月上旬まで)の時、山口を離れる直前に詠んだものであろう(二度目の来山は一四八九年五月から四カ月間程で、「声若し」が該当しない)。宗祇は大内政弘の招きで来山しているが、その政弘は、宗祇の来山の五年前(一四七五)に、「氷上山興隆寺法度十二箇条」なるものを制定している。

その中に「毎月の月次連歌会を武家から沙汰すること」と決められている。このことから、当時興隆寺に次ぐ威容を誇ったであろう仁平寺で、月次連歌会が興行されていたことは想像に難くない。宗祇の発句も、一概に眉唾とも言い切れない貴重な伝承と言える。

『防長風土注進案』は、江戸時代後期の長州藩の実情を、各町村から注進させた明細書をもとにした地誌で、天保十三年(一八四二)頃のことと記されている。この中に、仁平寺の伝承が記されている。近衛院の御代仁平元年(一一五一)の草創で、元号を寺の名としたということ。寺跡の南側の丘に五重塔の礎石があること。古老の言い伝えによると、今(天保十三年)から約百年程前までは五重塔が朽ちながらも建っていたが、前の池に倒壊したこと。今も周辺に、本坊・東蔵坊・寺家・仁王堂などといった地名が残ること。などである。

明治に入ると、わずかに観音堂のみ『防長寺社由来』に記された「本堂脇の小庵」が残っていたようだが、明治十六年に仁平寺復興の義が起り、山口の名刹禅昌寺の末寺として、宗派も曹洞宗に改めて新たに住職が置かれた。

そして、今現在。初代地は田畑となり、往時を思わせるものは何一つなくなっている。五重塔があったと言われている土地は農業用の溜め池となり、満々と水をたたえているだけである。初代地に向かつて右手に、日吉神社(山王社)が今も鎮座している。流れ造りの本殿に二階槽の拝殿を備えた見事な社殿である。境内

社として河内社・愛宕社・人丸社などをまつり、明和元年(一七六四)寄進の手水台、文政三年(一八二〇)寄進の狛犬一対なども残っている。約百メートルほどの参道入り口に建つ鳥居の辺りは、今でも「仁王堂」という地名で呼ばれているという。

現在の仁平寺は、初代地から直線にして約六百メートル程下ったところ、「山口市大内御堀四二〇一菅内」の地に建っている。

わたくしごとになって恐縮だが、筆者は、昨年(平成十五年)の夏、二度にわたって東北の地を旅行した。思うところあつてのことである。仙台、松島、瑞巖寺。塩竈神社では、「文治三年和泉三郎寄進」と刻印された宝燈を、この目で確認した。四百十四年前、かの俳聖も目にした宝燈である。山寺に登ったのは七月十三日であった。あの俳聖が「岩にしみいる」と吟じたのは、元禄二年(一六八九)五月二十七日。陽曆に直すと、まさに七月十三日。これを知ったのは、旅行を終えてからのことであつた。縁というものを強く感じた。山林の中に立つ石碑だけがそこを教えてくれる尿前の関では、寂として音のない中、しばらくの間佇んでいた。そして、平泉。中尊寺金色堂を後にして、茫漠とした毛越寺を散策し、藤原氏の栄華をかううじて残している常行堂を見て回った。ここで、今も「延年」の舞いが行われていることは仄聞していたので、その建物をこの目で見たかったのである。そして、資料館で

「延年」の記録を読んでいた時、「周防国仁平寺」の文字を見つけて、一瞬わが目を疑った。数ヶ月前に、仁平寺を訪れたばかりだったからである。

平成十五年二月十七日午前七時を数分過ぎた時、山口大学名誉教授石井大先生（日本語文化論コース）は、幽明境を異にされた。翌十八日、曹洞宗禪昌寺の町

## 偶然ドイツに 暮らすようになって

カウフマン越川智子

オーストラリアで知り合ったのがきっかけで、1991年にドイツ人と結婚し、それ以来フランクフルトの通勤圏に入る片田舎に暮らしています。田舎でも外国人は珍しくありません。

大学時代には、専攻が英米文学、第二外国語がフランス語で、自分の運命などまったく想像もつきませんでした。わかっていれば、せめて第二でドイツ語を習っていたのですが。夫を始め、オーストラリアで知り合ったドイツ人達が流暢な英語を話すため、すっかり「英語でも何とかなるだろう。」「ドイツに住むのだから、本気になれば速くマスターできるのでは？」と楽観していました。

欧州で英語がよく通じる国といえ（英語圏を除く）、北欧やオランダなどは。ドイツ語は、大陸では非常によ

田宗夫住職によってしめやかに葬儀が営まれた。その時、脇導師の一人を勤められたのが、日吉山仁平寺の田中大道住職である。

石井先生の御骨は、大内の地を見下ろす高台の墓地に安らかに眠っていらつしやる。法名は、「蕉風院大法通達居士」である。（人文第五回卒・国文学）

く話されている言語ですから、一般庶民層には日本のように英会話をマスターしようという情熱はありません。大都会や国際的な観光地、大学街に行けば、英語も通じますが、ごくごく普通の町や村では、ドイツ語が読めない、話せないとなると、子供以下の無力な存在となるのです。

言語だけではなく、メンタルな部分も問題でした。明確な意思表示をしないと誤解のもとになったり、議論好きなドイツ人の輪の中では、お地藏さんと化してしまいます。白黒をはっきりさせる、相手と違う意見を堂々と述べ、批判もするというのは、なんとなくグレイで曖昧、角を立てない日本社会と正反対ですから。常に夫が通訳できるわけではないし、何か買うにしろ数十分悩んだり、料理を簡単にしようといふスタントの素を買っても、作り方を理解するのに辞書を引き引き大奮闘。その方はずっと時間がかかりました。生活の全てがそうしたペースで中々自分の思うようには行きません。

ドイツ語を学ぶため学校を探したものの、田舎なので、ゲーティンステイ

テュートのような本格的なドイツ語学校はなく、隣の市にあるフォルクスホッホシュレ（公立の市民大学）に通いました。そこに「外国語としてのドイツ語」講座があるからです。良き先生に恵まれ、複雑な文法の基礎をわかりやすく教えて下さいました。クラスメートの多くが東欧人、ロシア系やイスラム教徒でした。まだ共産主義の名残が強く、例えばテーマが「買物」だと、バーゲンやインフレといった意味を知らない生徒が多く、先生が資本主義の仕組みから説明することもありました。最後の打ち上げパーティで私は

春巻きを作ることにになり、いつもの合挽き肉をチキンに変えたり……。今まで自分に縁がなかった国の人々やその文化に少し触れることができ、有意義な体験でした。

言葉が不自由でドイツの文化や常識を知らず、「この国に永住できるのだろうか？」と心配もしましたが、三、四年経った頃でしょうか、言葉もなんとかなり、ドイツの生活を楽しめる余裕が出てきました。それから、この暮らしが心地よく感じられるようになったのです。

私が暮らしているヘッセン州東部は、旧東ドイツのチューリンゲン州との州境が近く、東西冷戦時代は、こちら西側にはアメリカ軍、東側にはソ連軍が駐留し、ベルリンの壁ならぬ東西のフエンスが、見張りの塔や基地と共にどこか森や村を隔てて延々と続いていました。今は跡形もなく、その一部が

博物館になっています。

「ドイツの小京都」と私が勝手に命名した東ヘッセンの中心都市フルダは、バロックの美観地区が有名な美しい街です。ここには、「ドイツ人の使徒」聖ポニファチウスの墓がある大聖堂があり、カトリック信者にとっては大切な巡礼地です。中世には、ポニファチウスを始めはるばるイングランド、スコットランドやアイルランドから、多くの宣教師がキリスト教布教のために、この地にもやって来ました。立派な教会のある小京都ということで、山口を懐かしく思います。また、フルダは、ゲーテがフランクフルトからワイマールなど東部に旅する際、最初に宿を取った地でもあります。

日本の大学が大変厳しい状況であると、鴻文会会報（わざわざドイツまで発送していただき感謝しております）で読みました。ドイツの学校もギムナジウムや大学が大きく揺れています。数学など三科目について、OEC Dが2000年に32ヶ国の15歳の生徒達に実施した国別学力比較のPISSAスタディで、ドイツは三科目とも20位前後という非常に屈辱的な結果でした。戦後大きな改革をしなかったツケが爆発したといえるでしょう。教育は中央政府ではなく各州の管轄であることも、改革を難しくしているようです。小学校から大学まで、そのほとんどが公立で、授業料は原則的に無料となっていますが、政府の財政難で教育予算が削られ非常に厳しい状況です。



# 平成15年度 山口大学人文学部生涯学習事業

ドイツの大学では、母校や同窓生という意識はほとんどなく、同窓会というのほとんど聞きません。自分の

私たちは山口大学人文学部は、地域社会との交流を深め、幅広い年齢層の豊かな教養の保持と知的向上のために、十五年度、次のような事業を行ってまいりました。

## (一) 第十六回公開講演

毎年一回、山口県下のひとつの地域において、本学部の二名の教官がひとつのメインテーマのもとに、三時間程度の講演会を行っています。今年度は柳井市教育委員会のお世話になりました。

### ■日時

平成十五年  
十二月十三日(土)  
十三時三十分より

### ■会場

柳井市文化福祉会館  
メインテーマ  
日本社会の今と  
これからを考える

### ■講師・演題

辻 正二教授  
『少子高齢社会のゆくえ』  
横田尚俊助教授  
『市民活動の時代に向

「母校」があるのは嬉しいことです。

(人文第三回卒・英米文学)

### 【後期】

\*なお、来年度第十七回は、言語文化学科の国際コミュニケーション講座の担当で開催いたします。  
(二) やまぐちサタデー・カレッジ (公開講座)

(一) 昨年恒例となりました大学キャンパス内における公開講座(土曜大

学)は、今年度も昨年どおり、前期三コース、後期三コースの、合計六コースを開講し、それぞれ八回の講義を行いました。土曜日の午後、社会人、大学生、高校生が共に楽しく学んでおります。

### 会場 山口大学人文学部教室

### 前期(五、七月)

異文化交流コース  
林文孝助教授  
「死を前にした中国人たち」  
やまぐち学コース  
湯川洋司教授、坪郷英彦教授

「山口の民俗」  
外国語学習コース(英語)  
池園宏助教授  
「英語で学ぶ  
ロンドンの歴史と文化」

### 後期(十、十二月)

日本文化コース  
靄岡昭夫教授  
「歌と言葉」  
現代文化コース

奥津聖教授

「美的に生きる」

外国語学習コース(フランス語)

武本雅嗣助教授

「ペロロの童話を  
フランス語で読む」

\*なお、来年度も上記六コースについて、同時期に開講の予定です。ご希望の方は、受講のご案内のパンフをお送りします。  
(三) 出前講義

人文学部は、幅広い年齢層の知的探求心に応えて「必要なとき、いつでも学べる」場となることを目指して、本学部教官が気軽に大学の外に出向いて講義する「出前講義」を行っております。今年度も、山口県下を初め、九州、広島における地方公共団体や高校等に

出掛け多くの講義を行ってまいりました。  
来年度も、今年度同様、地域社会の要望に応えてまいります。教官の講義できる領域などを掲載したパンフを用意しておりますので、お気軽にお申し出下さい。

(四) 周南サテライトカレッジ  
周南市や県下の高等教育機関と連携して、徳山駅ビル市民交流センターで、今年度も月曜日に、本学部教官による大学レベルの二つの連続講義を行いました。  
(五、七月、八回)

坂本貴志講師/平山豊教授/  
阿部泰記教授/伊豆大和教授  
「世界の文学を楽しむ」

(十、十二月、八回)

尼川創二教授「大航海時代」を考える

\*なお、来年度も二つの連続講義を予定しておりますので、周南市の発行する募集要項をご覧ください。

## (五) 周南オープンカレッジ

周南市教育委員会(生涯学習センター)主催の生涯学習講座です。今年度も本学部教官による二つの講座を開講しました。  
(九、十月、四回)

本田義昭教授「現代ドイツの諸相」  
(十、十二月、五回)  
藤永康政助教授

「アメリカ探訪〜都市の歴史」  
\*なお、来年度も開講を予定しております。周南市の発行する募集要項をご覧ください。

## 人文学部 教官紹介

学部長(併) 田中 晋  
教授

### ○人文学部 人間学

教授 上野 修  
教授 高木 智見  
教授 豊澤 一  
助教授 脇 靖弘  
助教授 林 文孝  
助教授 アラム、ジュマリ

○言語文化学科

国際コミュニケーション  
 教授 添田 建治郎  
 教授 林 伸一  
 教授 岩部 浩三  
 教授 富平 美波  
 教授 太田 正利  
 助教授 下 正  
 助教授 磯部 佳宏  
 助教授 武本 雅嗣

社会情報学

教授 奥津 聖  
 教授 小谷 典子  
 教授 中村 友博  
 教授 辻 正二  
 教授 額 厚  
 教授 湯川 洋司  
 教授 坪郷 英彦  
 教授 横田 尚俊  
 助教授 高橋 征仁  
 助教授 山本 真弓  
 講師 藤川 裕一  
 講師 村田 裕一

歴史文化

教授 尼川 創二  
 教授 田中 誠二  
 教授 橋本 義則  
 教授 馬本 正彪  
 助教授 滝野 正二郎  
 助教授 藤永 康隆  
 講師 真木 隆行

助教授 柏木 寧子

○東アジア研究科(大学院)

教授 阿部 泰記  
 助教授 根ヶ山 徹



外国教師

アトモア、H

講師 島越 郎

講師 和田 秀学

助教授 乾 秀行

助教授 フィリップス、J・D

教授 本田 義昭

教授 平野 尊昭

教授 鶴岡 昭夫

言語情報学

講師 尾崎 千佳

講師 坂本 貴志

講師 森野 正弘

助教授 宮原 一成

助教授 池園 宏

助教授 エムデ、F・H

教授 平野 芳信

教授 井上 三朗

教授 平山 豊

教授 伊豆 大和

教授 田中 晋

教授 岡光 一浩

講師 更級 慎一

新任教官紹介

山口は 気に入っています

人間学講座・助教授 ジュマリ・アラム



一昨年の十月から、人間学講座の助教授として、宗教学を担当させていただきます。

ただただことになりました。微力ではありますが、これから、宗教学の重要性、現実性、面白さについて、学生や同僚の方々と、自らも探究を続けながら、分かち合っていきたいと思えます。

私の出身国はインドネシアです。小・中・高等学校と大学をジャカルタで過ごしました。インドネシアは多民族国家ですが、父はスラウェシ島のプギス族の出身です。母は小豆島出身の日本人で、私は東京で生まれ、八歳まで過ごしたことがあります。したがって日本は私にとって「自分の内面に存在する」外国です。なんだか、宗教学で語られるヌーメン性、すなわち「心の内側に存在する外在性または自律的な他者」に、どこか通ずるような感じがします。

二十六歳になった一九八八年に、私は、幼児期を過ごした東京に、留学生

として舞い戻ってきました。成田空港から寮に向かう際、東京ならではの狭い路地や下町を通り、心のどこかに潜んでいた子供の頃の断片的な記憶が、とても感動的な仕方で蘇ったことを、いまでも忘れられません。これも、宗教学心理学で語られる「個人的無意識」の顕現といったものを感じさせるシーンだったのかもしれない。

山口に来たのは、今回の着任が初めてです。赴任する際、それまで勤務していた東京の同僚たちから、「山口は自然のよいところだが、とても静かな田舎だ」「最初はよくても、しばらくすると東京のような大都会の暮らしに恋しくなる」というようなことを聞かされました。

たしかに山口は、自然に恵まれた、広々とした、静かなところだと思えます。しかも私は今回、市内の中心ではなく、大学へ自転車を通える黒川に家を借りることにしました。着任して以来、私の毎日の生活は、自転車で黒川―大学―付近のスーパーや飲食店の、往復の繰り返しパターンです。でもこうした生活には、とても満足していません。決して高級な環境ではありませんが、研究室や家の向こうには山々の景色が広がり、研究に必要な書籍類、また日常の雑貨類は、すべてインターネットで注文でき、研究者にとって余分な騒がしさから逃れる、これ以上ない環境と暮らしたと思えます。また、それまでは大学の環境にしながら「大人」同志の交流が中心でしたが、今度

は、宗教という難しい人間の側面を、若い人たちと一緒に考えたり語り合ったりすることができ、これも研究仕事への貴重な刺激だと感じています。

宗教は人間の心の、非合理的・非論理的な部分と関連します。理論的・論理的な理解は重要ですが、感性を抜きに捉えられる現象ではありません。山口の環境はこうした感性を育むものだと私は感じています。

## 新任のごあいさつ

社会情報学講座・講師  
村田 裕一



願いました。

といたしまして、私は今年度、新たに山口大学に赴任したではありません。本学勤務は、今年度で9年目になります。昨年度までは、学内共同利用施設である埋蔵文化財資料館に勤務していました。資料館は、本学キャンパスに所在する遺跡の保存と活用を主な役割とする施設です。具体的には、建物建設など大学施設の整備がおこなわれる際に、事前の発掘調査をおこない、出土遺物を整理保管し、これらを研究して、成果を展示公開しております。大学に限ったことではありません。

今年度から、人

文学部に勤務することになりました。専門は考古学です。よろしくお

せんが、いわゆる開発行為に伴う発掘調査は、国の法律に基づく処置であり、学問的な立場に加えて行政的な局面を含んでいます。資料館は助手2名、補佐員2名の小さな組織構成ですが、このように大きくは文化財行政といわれる分野の末端を担う施設であり、大学の教育・研究の基盤整備にとって必要不可欠の施設なのです。資料館は、これに加えて学内共同利用施設として、学術的な研究の推進と、普及活動としての公開事業をおこなっています。ここに、資料館業務の難し

さが集約されます。ここでの勤務を通して、学んだことは大きかったと感じています。私は既にこの組織の構成員ではありませんが、これからも、学内外の多くの方々からのご支援をお願いいたします。

ところで、私自身は弥生時代の道具の移り変わりと、それに伴うあるいはその移り変わりの要因となった社会の動態について研究しています。弥生時代は、それまで数万年来使われてきた石の刃物が、金属の刃物へと材質を大きく転換する時代です。以後刃物の主流は鉄になります。石から鉄への転換のアウトラインは、鉄器技術の研究などから、その質的な側面についてはほぼ固まりつつあります。しかし、普及の実態については、まだまだ不確定な要素が多く含まれています。近年の私の研究テーマは、鉄器普及の量的な側面を解明する実証的な指標を確立することにあります。私の研究では、これに砥石を使うのですが、一昨年は、おこなった資料調査で良好なデータを得

ているのですが、なかなか細部を詰めることができないでございました。人文学部に来たことを機に集中的に取り組みたいと思っております。

学生との関わりは、昨年度までと大きく異なることになりました。これまでは、基本的には本学の教育システムとの関わりはほとんど無かったわけです。2・3年に数人程度、考古学の専門職を希望する学生に、考古学の実技を指導したことはありました。今年度からは、カリキュラム上から教育に携わることになったのですが、日々の講義の中で、自らの研究内容を学生に的確に伝えてゆくことの難しさを強く実感しています。後期の講義もあと一月を残すばかりとなった今になっても、まだまだ不慣れで戸惑うことの連続です。こちらは一人ひとりの学生に熱心に接しながら、ゆっくりと取り組んでゆきたいと思っております。

国立大学は、来年度から国立大学法人として生まれ変わり、新たなスタートを切ることとなります。この流れの中、ここ数年は本学も慌ただしく動いてきました。これから先もまだ数年は、この慌ただしさは続いてゆくのでしょうか、私自身はじつくりと構えて、教育・研究に着実な道筋を残してゆきたいと考えております。どうかよろしくお願い申し上げます。

## 日本と

中国を前にして、  
感じてきたこと

国際コミュニケーション講座・講師  
更科 慎一



今年度十月より山口大学人文学部講師として着任致しました更科と申します。専門は中国語学です。皆様方には、謹んで着任のごあいさつを申し上げます。この機会に、自己紹介をさせていただきますと思います。

これまで、常勤はおろか非常勤講師さえも経験したことがなく、東京で大学院生をしておりました。子供のころ、たまにみた「テレビ中国語講座」がきっかけとなり、趣味で中国語の勉強めいたことを始めました。1980年代前半、中学生時代には、中国の省や自治区の放送局が行っている少数民族語番組を短波ラジオでよく聞いていました。これらの放送は、はじめ申し訳程度にニュースを読むと、あとは終了時間まで音楽番組になるのが常でした。例えば、新疆人民放送局では、豊富なリズムを持ち、アラブIIペルシャの音階と東アジアの音階が同居するウイグル族の音楽が堪能できました。雲南人民放送局は、当時、5種類の少数民族語（西双版纳タイ語、リス語、ラフ語、徳宏タイ語、ジンポー語）で放送を行っていて、それぞれに特徴があり

ながらも、東アジア一帯に共通する旋律形をもった、のんびりとした歌をたつぷり聞かせてくれました。チベット自治区や青海省の放送局にはチベット語番組があつて、こぶしのきいたチベット民謡を流していました。

中学時代に、中国のラジオや、テレビ「中国語講座」で聞いた音楽は、私の当時の中国イメージを形成しました。感銘を受けたことは、それらのほとんどが伝統音楽を基礎としていることです。中国は伝統をとっても大事にしていると感じました。そして、日本はどうしてそうでないのだろうと嘆きました。中学校の音楽の先生に「意見」を書いたこともありま

す。大衆社会日本に住む少年時代の私には、社会主義の中国がとても新鮮であつて、中国こそが、日本にない落ち着きと折り目正しさをもった、すばらしい社会であるように思えたのです。

それからしばらく後、少年時代の幻想が幻想であつたことを少しずつ知りました。幻滅は、真理探究のために喜ぶべきことです。幸い、大した心理的打撃を受けないこともなく、幻滅のあまり猛烈な反中国になるといふこともありませんでした。少し社会評論めいて恐縮ですが、日ごろ中国と何の接点もないであろう大多数の日本人の中にある中国イメージが今、どのようであるのか、少し心配です。同じことは、韓国や北朝鮮へのイメージについても言えます。平均的日本人の隣国へのイメージは、おおむね、日々の生活実感に、新聞やテレビの情報加わつて形成されると思われれますが、それら

情報は日本語で書かれ、日本国内だけで流通するものです。その中だけにとどまらないためにも、英語をはじめ中国語や朝鮮語などの外国語を学び、情報への接近の幅を広げ、読解の能力を高めること

## 研究室紹介

### ◎ 博物文化論コース



2003年 考古学実習風景

本学部は大講座制の実施に伴い、人文社会学科のうち実験講座である専攻分野を社会情報学講座に合併統合し、教育編成としておもに社会学系からなる社会情報論コースと博物文化論コースの二専攻を設置しました。

博物文化論コースは、もと哲学系の芸

が、今とても必要だと感じています。いわば趣味が昂じて中国研究の世界に入った者ですが、現在の職責に、使命感を新たにしています。

術論・美術史学と歴史系の考古学の二専攻からなります。現在、二年生では何らかのコースに所属し、三年生からは指導教官制となります。したがって研究室による学生の専攻別はありませんが、実際は学習設備が二研究室しかなく、しかも美学系が四階、考古学研究室が三階にフロアーを揃えているので、芸術論・美術史専攻と考古学専攻ははっきり仕分けられております。また、芸術論・美術史担当の教官数二名、考古学担当の教官数二名も以前と同じです。ただ違うのは単位の取得上、相互の乗り入れ受講生がとくに二年次では多くなりました。現在のコース専任教官は次のとおりです。

奥津聖先生は、美学・芸術論が専門で、特に「イメージの解釈学」を現代の観点から新たに構築することを課題として講義を行つています。解釈学は最初、聖書をどう読み解くかという関心から発した学問ですが、現在、その対象は芸術一般にまで広がられています。ルネサンスから現代にいたるまで様々な造形芸術を、スライドやビデオなどを用いて解釈しながら、「芸術とは何か」という美学的な問題をも同時に考察しています。

藤川哲先生は、埼玉大学に移られた外山紀久子先生の後任として二〇〇二年四月より同コース講師に就任しました。美

術史を専門に、特に「現代美術史」を講義しています。国内外で開催される国際美術展を紹介し、グローバルゼーション時代における美術をめぐる問題を考察するほか、二〇世紀を通じて行われてきた「美術史学」の方法論への批判的検討についても紹介しています。

考古学では山大で二五年近く教鞭をとられた近藤喬一先生が去る二〇〇三年三月をもって定年退職になられ、京都に転居されました。自宅の修学院と書庫のある東山との往復で結構忙しくされています。初代教授であつた鈴木博司先生は同じく京都にお住まいで、まだ研究室に資料を送っていたいただき、重宝しております。この場をお借りして、両先生のご壮健をお祈りします。

近藤先生の後任には、埋蔵文化財資料館から村田裕一先生が講師として着任しました。代わつて、埋蔵文化財資料館には横山成巳助手が新たに着任され、田畑直彦助手と二人三脚で業務を担当されています。

村田先生の専門は鉄器、石器、ガラスにわたりますが、主に鉄器化の現象を研究されており、これに対し私こと、中村友博は相変わらず土器を対象にし、このところは自分の実測した図面をファイル化する作業をしております。この取材につきましては卒業生の何人かにも、お世話になりましたのでお礼を申し上げます。

さて、両専攻にはこの所、毎年それぞれ十名、計二〇名くらいが進級し、一学年のほぼ定員を満たす状況ですが、

圧倒的に女子学生が多くなりました。と同時に県内出身者も多くなりました。美学はとうの昔に女所帯で徹夜のできないことが悩みでしたが、考古も今や男子は貴重品になりました。

昨今の深刻な問題は就職難です。考古学の専門試験が高倍率になって、経済不況のしわ寄せを直接被って専門職員にはなりにくくなっています。美学も同様な問題を抱えておりますが、二〇〇三年十一月に山口市内に開館した山口情報芸術

平成14年度  
人文学部卒業生  
大学院修了生  
進路状況

人文社会学科

- 建設業** 福田組
- 製造業** 江副石材工業、宇部薄鋸、オーガス、コカ・コーラウエストジャパン、ジョンパル、ゼンリン、大成社、日本電産、丸住製紙
- 運輸・通信業** キューソー流通システム、平成電々
- 卸売・小売・飲食業** イズミ2名、スズキ白阪山口、体育社、大創産業、たけうち3名、ナフコ、ニトリ、ビックエス、ビックベン、マツダアンフィニ山口、丸久、三城、山口スバル、山口トヨペット、ユニクロ
- 金融・保険業** エグチフューチャーズ
- 不動産業** 原弘産、レオパレス21、
- サービス業** ELBEC教育図書センター2名、サメディアジョン、J A 山口宇部、七

センターや、以前からある秋吉台国際芸術村には卒業生が若干名就職しており、在学生はボランティア・スタッフ等としての活動と交流を通して、現場から知識を学ぶ機会が増え、大変よい刺激となっており。二〇〇四年度から国立大学は一斉に独立行政法人となります。法人化後も、なにとぞ研究室の行く末をご支援ください。

(コース委員・中村友博)

- ントラルリス、中国新聞社、NOVA、富士通岡山システムエンジニアリング、山口ロー、優輝会
- その他 農業
- 教員 明誠学院高等学校
- 公務員 島根県庁臨時職員、津屋崎町教育委員会、東伯町役場、長崎県教育庁非常勤職員、長崎大学、福岡県警、法務省刑務官

進学

- I M I 大学院スクール、大阪市立大学大学院、九州大学大学院、山口大学大学院5名

言語文化学科

- 製造業** オンワード樫山、再春館製菓所、大成社、中央出版社、長州産業、日本メナー
- 電気・ガス・熱供給・水道業** 広島ガス
- 運輸・通信業** JTB2名、JALスカイサービス、柳井市交通安全協会、レキオス航空、
- 卸売・小売・飲食業** 愛グループ、小田億、株式会社はる、西原商会、成和産業、中国

- 明販、ティーツー、明屋書店、丸久、山口スバル、ヨドバシカメラ、
- 金融・保険業** 呉信用金庫、グローバリー、西京銀行3名、津山信用金庫、山口銀行
- サービス業** 大田記念病院、クリエイティブ、向学社2名、ジャストミートコーポレーション、セリオ、総合メディアカル、七田チャイルドアカデミー、ヒューマンネットワーク、富士通テクノシステム、ベルシステム24
- 教員 盈進中学高等学校、たちばな幼稚園、長崎県教員2名、長崎県教員(臨探)2名、福岡工業大学附属城東高校、山口県教員(高校)
- 公務員 萩市役所、福岡市役所、山口県立大

住所不明者( ) 内旧姓

- 進学 大阪大学大学院、九州大学大学院、神戸大学大学院、広島大学大学院、山口大学大学院、立命館大学大学院

大学院人文科学研究科

- 地域文化専攻** アデコキャリアスタッフ、JACKコーポレーション、高森高校教諭、中国運輸局、山口県庁、山口市臨時職員、郵政公社
- 言語文化専攻** 宇部短期大学(非常勤)、高木学園グローバルインテグル国際語学院、山口大学大学院東アジア研究科進学











## 編集後記

遅くなりましたが、「鴻文」二三号をお届けいたします。皆様ご承知のように、山口大学は四月から独立法人となります。従来の年度末の忙しさに加えて、法人化準備のため、悲鳴をあげるような超多忙が続いております。そのため、二三号の編集作業も大幅に遅れ、早く原稿をいただいた方々および一般の同窓生の皆様には大変ご迷惑をおかけいたしました。

法人化後の山口大学がどうなるのか、内部にいる私たちもきちんと把握できておりませんが、新たな発展の第一歩となることを願っております。社会の風潮として、数値化できるような成果や世の中にくぐ役立つものに目が行きがちですが、こういう時代だからこそ、人文分野の諸学間も重要性を増していくように思われます。同窓生の皆様には、今後とも山口大学、人文学部の発展に一層のご支援を賜りますようお願い申し上げます。(HY)